

匠 たくみ

船大工の技術を 後世に



霞ヶ浦の風物詩である帆引き船は、明治13年に佐賀村（現かすみがうら市）の折本良平氏によってシラウオ漁を目的に考案され、ワカサギ漁としての帆引き船は、明治30年に地元行方村の鈴木宗作氏によって考案されたものです。帆引き網漁は、船を機に走らせることで網口を大きくし、漁獲量を増やすという画期的な漁法で、最盛期には約900隻が操業したとされていますが、その後、トロール漁に変わり姿を消しました。帆引き船は、霞ヶ浦の漁業史を知る上で重要な文化遺産であることから、行方市では観光帆引き船として復活させ、7月下旬から12月上旬にかけて土日や祝日に操業を行い、写真愛好家などから大変好評をいただいております。

霞ヶ浦流域の船大工の数は減少の一途をたどり、後継者消滅が叫ばれております。

市には現在、観光用としての帆引き船が5隻あり、そのうちの2隻を荒宿在住の船大工、田上一郎さん（76歳）が製作しました。現在も現役として活躍され、帆引き船を造って60年の田上さんに、磨き抜かれた匠の技を伺いました。

技術の習得

17歳から船大工の仕事を始め、今年で60年を迎えます。私は3代目ですが、父が病気でしたので、直接教わることはありませんでしたが、他の船大工や漁師に聞きながら、船の製作や修理を重ねるうちに自己流で技術を習得しました。父から手とり足とり教えてもらえなかったことは残念ですね。しかし、自己流とはいえ、船大工の使命として人が乗っていて安心できる船を造ることを常に念頭においていました。

これまでに80隻ほど船を製作し、帆引き船は約30隻製作しました。折本氏が考案した当時の帆引き船は、1人で操業できるほど小さかったのですが、風の力を利用して漁を行うため、大きくなっていました。

帆引き船の漁は、7月から10月の日没から日の出まで行われました。風が強い日は、帆柱が折れるなどしたため、夜中でも修理に出かけたこともありました。

磨き抜かれた匠の技

帆引き船以外にもウナギを捕るための延縄（はえなわ）漁、えびやごろを捕るための「ささびたし」漁などの船についても、漁師の注文に応じて製作しました。

帆引き船を製作するにあたって注意することは、第一には、風や波に絶えられるように造ること。第二点目としては、水が入らないようにすることです。そのためには板と板をすり合わせるときは、乾燥の度合いに気を配りながら慎重に作業を行います。すり合わせとは、2枚の板を合わせ、1枚の大きな板にするための接合部の加工のことです。この部分が一番難しい作業といえます。また、材料選びも重要な要素です。最盛期の時代は、帆引き船の材料を扱う材木店があったのですが、現在は、専門の仲介業者と一緒に山に入って、自ら木材を探します。木材は杉で、伐採は、水分が少ない時期の秋から冬にかけて行います。



田上 勇一さん・一郎さん



木材の選定



和釘の埋め込み



根板と和板の合わせ

観光帆引き船

「なめがた丸」の製作

平成21年5月、市から観光帆引き船の製作依頼がありました。製作には6カ月の期間を要し、平成22年7月に進水式の運びとなりました。船の名称は「なめがた丸」。多くの皆さんに見てもらいたいことが何よりうれしい。今年度の観光

これまでに製作した船の中で一番大きいものは、長さ13mの帆引き船です。しかし、満足の行く船ばかりではありませんでした。漁師が安心して操業できるよう二丁に合った船を造ることを心がけています。

伝統技術を

後世に伝えるために

「なめがた丸」の製作には、4代目となる息子（勇一さん）も参加しました。人に教えることは自分で造るよりも難しいことを痛感しました。一緒に作業しながら手順を説明しました。帆引き船の設計書などはありませんので、製作過程を日記形式で書き留めていました。今回、写真やビデオにも記録しましたので、これらを息子に託したいと思います。

帆引き船の操業は終了しましたが、次の操業期間には、多くの方に行方市に足を運んで欲しいです。

取材当日も息子さんの勇一さんとともに作業をしていた一郎さん。

田上さんにお話を伺い、戦後日本の高度成長を支えた「ものづくり」の大切さを見つめました。

地元の玉川小学校の児童が社会科見学で田上さんの造船所を訪れたそうです。木材の種類や漁の方法について質問を受けたのですが、子供たちに、木を身近に感じてもらうとともに、ものづくりに挑戦して欲しいという田上さん。船大工の技術を後世に残していくため、その能力を伝えるためにも「茨城県職業能力開発推進大会」で優秀技能賞を受賞した田上さんの仕事は続きます。



完成した「なめがた丸」

現在、進水式を終え行方市の観光帆引き船として活躍しています